



『逆命利君』

佐高 信

逆命利君とは「命に逆らいて君を利する、之を忠と謂う」を略した言葉だ。漢の劉向が編纂した『説苑』から流用した。かみくだいていえば命令に逆らっても正しいと思うことを進言するのがほんとうの忠義だということになる。

住友商事の元常務・鈴木朗夫は身をもってこれを実践した。佐高による評伝的ノンフィクションは鈴木の反逆的な生きざまを活写している。

フランスにあこがれていた鈴木は自分を「ムッシュ」と呼ばせていた。詩人のジャン・コクトーに心酔し、彼が死んだときは1週間、黒いネクタイで出社した。遅刻の常習犯で会社への届けには「昨夜、当社の将来を考えたら眠れなくなった」「今朝は靴の紐がよく結べなかった」などと平気で書いた。

とはいえ仕事を怠けていたわけではない。役員レースでは同期のトップに立ち、「住商に鈴木あり」といわれたほど抜群の能力を発揮した。

遅刻をとがめられたとき、鈴木は胸を張って「私は午後から出社しても、普通の二倍以上の内容のある仕事をやっていますよ」と答えた。遅刻も鈴木にとってはひとつの闘いだっただの。

だが鈴木のようなアウトサイダーを簡単に受け入れるほど日本の企業は甘くない。鈴木が辞職せずに済んだのは上司でのちに社長にまでのぼりつめた伊藤正がいたからだ。

伊藤は鈴木とは正反対に真面目すぎるほどの企業戦士だった。まさに水と油である二人はあらゆる局面でぶつかった。しかしそのうち伊藤は「自分は会社に時間を売っているのではない、仕事を売っているのだ」と言って筋を通そうとする鈴木生き方に共感を示すようになる。

鈴木は信念を曲げることなく自己を主張しようとした。伊藤はとまどいながらも彼を守り抜こうとした。伊藤がいなければ鈴木は事なかれ主義の重圧に押しつぶされていただろう。

1987年10月2日、鈴木は胃がんによって56歳の若さで亡くなった。壁に体当たりするような日々の連続が寿命を縮めたのかもしれない。

虎は死んで皮を残すという。組織と個人について考えるうえで鈴木の生きざまはいまなお暗い光芒を放っている。(高倉)

○講談社文庫・定価565円(税込)／さたか・まこと
山形県酒田市生まれ。慶応大法学部卒。郷里の高校教師、経済誌の編集者を経て評論家。著書に『会社人類学入門』『情報は人にあり』など多数。

【応募締切日】

平成29年5月11日(木)当日消印有効

【提出先】

機構の各都道府県支部高齢・障害者業務課へ提出してください。

【賞】

(1) 厚生労働大臣表彰

最優秀賞 1編 優秀賞 2編 特別賞 3編

※審査の結果により、編数は変更になる場合があります。

(2) 独立行政法人高齢・障害・求職者雇用支援機構理事長表彰

優秀賞 若干編 特別賞 若干編

【審査】

学識経験者等から構成される審査委員会を設置し、審査します。

【入賞企業等の発表等】

(1) 入賞企業等は、平成29年9月下旬を目処に厚生労働省及び機構において各報道機関等へ発表するとともに、入賞企業等には、各表彰区分に応じ厚生労働省または機構より通知します。また、10月中に表彰式を行います。

(2) その他、厚生労働省及び機構のホームページ、機構発行の「エルダー」誌上に入賞企業等の事例を掲載する予定です。

【問い合わせ先】

機構(ホームページ <http://www.jeed.or.jp/elderly/activity/activity02.html>)

機構の各都道府県支部高齢・障害者業務課(ホームページ <http://www.jeed.or.jp/location/shibu/>)

【その他】

応募した文書の著作権及び使用権は、主催者に帰属するものとし、応募事例は、厚生労働省、都道府県労働局、ハローワーク及び機構が実施する啓発活動に活用します。